
桜散る

真崎麻佐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜散る

【Nコード】
N8174B

【作者名】
真崎麻佐

【あらすじ】
僕は後ろの席の櫻井君の言葉が気になって…。「桜」についてのお話です。

（前書き）

皆様にとつての「桜」を教えてください。評価、感想よろしく願
いします。

「桜が…散るのを嫌がってる…」

僕の席は窓側の前から四番目。春は太陽のポカポカな光を浴びる事ができる特等席の一つだ。窓から見える桜が絶景だった。

六時間目。僕は最後の授業をただボーッと受けていた。残り15分という時に後ろの方から声がした。

「桜が…散るのを嫌がってる…」
ボソツとした声だったがよく聞こえた。僕は窓の外を見た。桜がヒラヒラと舞っていた。

僕の後ろの席は櫻井君だ。いつも飄々としていて、掴み所がない。噂では中学の頃は金髪だったらしい。とにかく僕は櫻井君が苦手だった。

「ねえ…さっきのつて、どういう意味？」

終礼が始まる前のザワザワの中で、僕は後ろを向いて櫻井君に話しかけてみた。

「ああ…聞こえてたんだ」

「うん」

無表情な櫻井君に怖じ気付きながらも僕は続けた。

「桜が…散るのを嫌がってるって？」

「ホラ、見なよ」

櫻井君が指差したのは、窓にへばりついた一枚の桜の花びら。

「これ？」

僕には良く意味が分からなかった。

「桜つてさ、窓の位置より下にあるだろ？」

僕達の教室は四階。一番伸びている桜の枝より高い位置にある。

「だから大体は上に飛んで来たりはしないよな」

確かに、と頷く。

「だから散りたくないんだ、と思った」

櫻井君はボーッとした顔で外を見ている。僕もつられて外を見た。

「…そうか、風が手伝ってくれたんだ」

ポツリポツリと溢す一言一言に重みがある。僕は黙って聞いていた。

「桜が散りたくない、そう言うから…風は桜が少しでも長く空中に居られるように、手伝ったんだ」

櫻井君は目を細めた。窓の外ではまた桜が高くヒラヒラと舞っていた。

「…風が？」

櫻井君は僕の言葉に反応しなかった。

「でも風は知ってるんだ…」

ヒラヒラ高く舞う桜の花びらはすぐに見えなくなった。地に落ちたのだ。

「夢を見られるのは少しだけだ、ってね」

「桜つてさ、散ることが美しいってよく言われるよな」

櫻井君が初めて僕の顔を見た。僕は少し驚いたが、真っ直ぐ櫻井君を見た。

「散らなきゃいけない、って言われてるみたいだ」

「…確かに」

「桜だつて散りたくないかもしれない。だってさ…」

フツと顔を崩して笑う。

「人間だつて死にたくないんだもんね」
僕はドキッとした。

「そんなこと、考えもしなかった」
「そう？」

ふーん、と櫻井君はただ頷いた。

「別にただ俺が思ったただだからね」

ヒラリと窓にへばりついていた桜の花びらが散った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8174b/>

桜散る

2010年11月5日07時41分発行